

## もつとも小田原市民会館が輝いていた時代

おだわらライブリー通信第3号では、「もつとも小田原市民会館が輝いていた時代」と題して、神奈川を代表するアマチュア劇団である劇団こゆるぎ座の関口秀夫座長と、代々長唄三味線の名跡を受け継ぎ、小田原で三代に渡りお住まいになる杵屋六響さんにお越しいただき、お話を伺いました。小田原に根付いた市民の文化は、時代の要望と鈴木十郎市長の手腕を持って「小田原市民会館」という形で結実しました。その背景には、こゆるぎ座を中心とした文学・演劇の未来を夢見た若者たちや、宮小路周辺の旦那衆の「粋」なお座敷や芝居小屋の文化があったことが分かりました。

市民会館の完成は、夢の到来でした  
関口秀夫さん（劇団こゆるぎ座座長）

私の父は恩給局の官吏で、家が神田神保町にあり、私もそこで生まれました。戦火が厳しくなった昭和十九年に小田原に疎開してきました。すぐに戻れると思っていたのですが、昭和二十三年に父が重い結核にかかって入院し、東京に帰ることを諦めました。私が数え年で六歳の時ですね。父は十年の闘病生活の末、亡くなりました。それからはいよいよだいたいとともに、母の女手一つで育てられました。子どもの頃の私は、先生になるのが夢でし



た。小学校時代の先生は私に元気をくださった先生で、私が演劇と出会ったのもその頃です。

小学校の学芸会に選ぶ台本は、図書室にある既成作品がほとんどでしたが、私の先生は生徒が書いたものを演じるのが理想だと仰ったのです。それで、手を挙げたのが私でした。小学校五年の時のことです。紙も不足しがちな時代で、先生からわら半紙をいただいて、机の代用としてリングボックスの上で書きました。劇のテーマは「なかよし学級」というものです。当時、ガキ大将のような子がクラスにいます。正義感の強い私は、頭のいい子が悪ガキをおとなしくさせるという筋立てを書いたのです。この体験は、新鮮な出来事として演劇に興味を持つきっかけとなりました。

六年生の時にも、野口英世の少年時代を題材にした既成作品で、私は主役の野口清作少年を演じました。有名なエピソードとして、やけどでくっついた手を馬鹿にされ、ナイフで切り開こうとして友人に止められる感動の場面があります。舞台の上から、お客様が劇を見て泣いているのが見えました。当時の私にはそれがなぜ、泣いているのか分かりませんでした。ただ、この時の感動が、人から人へ何かを伝えるという演劇の根本を知るきっかけとなったのです。



舞台「なよたけ」（こゆるぎ座四十年記念誌より）  
小田原市民会館大ホールで、照明の機能を存分に生かした  
精妙な舞台が作られた

劇団こゆるぎ座の創設は、昭和二十一年一月の事です。戦前・戦中は危険思想として文化活動が抑制されていきましたから、取締りから隠れて活動していました。戦後の自由な社会になって、早稲田大学の文学青年たちが十五人ほど集まって、小田原に文化活動を起こそう、具体的に何をやるかというときに、人間の心情を伝えて心に良い影響を及ぼすことができる、演劇を選んだといえます。

私は結成から十年ほど経った頃、入座しました。劇団の主要な人たちは、創設者の後輩にあたる人たちで、後で聞くと、創設者たちの理想を受け継ぎ、低迷した頃と聞いています。若手劇団員獲得のために、こゆるぎ座の人たちは、小田原高校の演劇部に足を運び、演技指導をしつつ、スカウト活動をしていました。私も高校三年のときに加入することになりましたが、最初の仕事は、照明チーフのお手伝いでした。

この頃、北条秀司先生（劇作家・1902-1996）が関係してきます。北条先生が小田原に来られたのは『玉将』を書かれていた頃で、すごい劇作家が来ていると聞いた先輩たちは、ご自宅に押しかけて教えを乞いました。

た。先生は厳しくも温情豊かな方で、若者の気持ちにいたく感動されて、ご自身の演劇の根本理論を教えたと言います。私自身も、後世には直接稽古をつけてもらったことがあります。当時はまだ、公民館や小学校の講堂といった施設がありませんでした。芝居小屋としては「御幸座」がありましたが、大きすぎました。学校の講堂などは演劇に必要な設備がないため、上演作品も限られていて、照明の効果が必要な作品などはできませんでした。私が入座した頃には中央公民館が完成していて、演劇には不向きでしたが、そこが公演会場でした。

小田原市民会館のこけら落としは、歌舞伎に造詣の深い鈴木十郎市長さんの時代でしたので、メインは歌舞伎でしたが、一般からの市民代表としてはこゆるぎ座が選ばれたのです。当時の座長を努めていた野村幸靖さんは、設備の整ったホールなら『なよたけ』（作・加藤道夫）ができる、といって、上演することになりました。こゆるぎ座が、今までやりたくもできなかった大作を上演するようになるのは、これ以後のことです。公演日には、北条先生の娘さんの北条美智留さん（女優1930-）がいらしてくださり、「幕が開いた瞬間に、なにかいいものが見られるのではないかと、ぞくぞくと予感がした」と仰っていたことが今でも覚えていいます。

野村幸靖さんは私を非常に可愛がってくださった先輩で、こゆるぎ座の創設から三年後に入られた方です。小田原の工務店で現場監督をしながら、演劇活動をされていました。当時、私たちが次回公演を考えていたところに現れて「演劇を馬鹿にしちゃいけない。人に希望を与える大きな仕事でなければならぬ」と。その候補作品では、こゆるぎ座の目指す演劇理念とはかけ離れているということで、岸田国士（劇作家1890-1954）の短編を二本を奨めました。先輩たちが仕事を引つ張っていきなりとなります。

『なよたけ』は野村さんがやりたかったから、という理由が大きいのです。まさに夢の到来だったのだと思います。

野村さんが座長となって十年が経った頃、ドストエフスキーの『罪と罰』を翻訳した福田恆存(評論家・翻訳家 1912-1994)先生のもとへ上演許可をもらいに行き、先生の作品を是非とも演(や)らせていただきたい、と懇願して許可を得ました。

公演一ヶ月くらい前、塔の峰の青少年センターで合宿をしました。すごい台風がぶつかり、雨で屋根がすべり音を立てていたので、野村さんが「演劇は人に言葉伝えるものだ。こんな音の中でも聞こえるまで声を出せ」と、喉がヒリヒリするまで声を出したのを覚えていいます。

ところが、野村さんは『罪と罰』上演の前に事故で亡くなってしまいました。葬儀の後、上演をどうするか話し合いました。先輩たちは「やめろ。『罪と罰』を選んだこと自体とんでもないことだ」と言います。上演中止の流れになったのですが、私は「自分たちは野村さんから情熱を学んできたはずだ。ここで火を消してならない」と、先輩たちを前に言いました。その言葉に先輩方が賛同して協力してください、と「罪と罰」を公演できたのです。

野村さんが亡くなり、私が遺志を受け継いで座長となり、大作に励むことになりました。島崎藤村の『破戒』やシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』。ほかに、『アンネの日記』だとか『炎の人』(作・三好十郎)、これは画家のゴッホを題材にした劇団民藝の看板演目でした。三好先生に「ぜひ上演させてください」とお願いしたので。

二十周年記念公演の北条秀司先生の『修羅』。これは木曾義仲の物語で、北条先生が新国劇のために書いた芝居でしたが、特別に許可を頂きました。本邦初演です。北条先生も何度か稽古を見に来てくださいました。私は主役の木曾義仲を命じられて、大役でしたね。稽古では何回も泣きました。

演出は、座の創設者で、松竹の映画監督にもなられた井上和男さん(1925-2011)が担当されました。ところが、私だけには厳しかったんです。アマチュア劇団だからみんな仕事を持っていて、彼らには何も言わない。私は台詞が二百三十本、これを一ヶ月で覚える、覚えたら台本を離せと。懸命に覚えましたが、ちよつとでも台詞を間違えると「なんだお前は!」と怒鳴られる。私は居たたま



舞台「修羅」木曾義仲役を演じる、関口さん(こゆるぎ座四十年記念誌より)

れなくなつて泣き出しちゃったんです、稽古場で、あぐらをかいて。開き直つちやっただすね。

公演の一週間ほど前、北条先生が稽古を見に来てくださいます。娘さんと帰る車中で「あいつのいいところは一生懸命やっているだけのことだ。でもまあいいじゃないか。人間っていうのはそういうことが大事なんだから。ただ、あの声がつぶれないか心配だ」と。プロの役者にも厳しい方ですからね。「なかなか清潔感があつていいじゃないか、芝居は下手だけだな」と、それは後から聞いた話です。

おかげで公演は無事に幕を下ろしました。終演後、井上和男さんから「お前、よかつたじゃないか」と。もう涙がポロポロ止まらなかつたです。

三十周年記念公演は『丹那隧道』、これも北条先生の作品ですね。丹那トンネルを開通させたときの苦闘史です。四十周年は『顔役』、これも北条先生の作品です。

お話ししておきたいのが、後藤翔如さんという、こゆるぎ座の座付き作家です。彼が書いてくれた作品が、こゆるぎ座の地場を固めてくれた。彼がこの二十年、ずつと書いてくれたことが、こゆるぎ座の主張する「地域に根ざした演劇活動」という使命を果たしてくれました。小田原には歴史の史実がいくつでも埋もれています。後藤さんは小田原をよく知っていて、それを掘り起こして長編作品を書いた。これが大変な評価を受けたのです。幕末期の小田原藩の家老の物語。小田原は譜代藩だから官軍と戦う立場になった。それを身を挺して収めたという物語。『荻窪上水』

は箱根湯本から用水路を引いた苦闘史。それから『小田原義民伝 下田隼人』。小田原藩の厳しい取立てに、打ち首を承知で訴えていく。総勢五十人ほどの人々が出演しました。彼は、誰がこの役をできるか、必ず返事を聞いてから書き上げる。「まずは役者」なんです。それぞれの個性を見定めて、構成して会話を成り立っています。ともかく面白く丁寧な発止でいって、会話をつなげる。それには役者を固めなければ、というのが持論でした。彼は室町時代でも、江戸時代も、明治も昭和もやりました。ただ最後は、地震をテーマにしたい、と。小田原城は元禄大地震で崩壊しているんですね。関東一円の大地震ですから、復興には幕府も金を出せない。そこで小田原の木工の棟梁たちが「官がでなければ民で」と、傾いた天守閣を立て直した。そんな構想がまとまってきました。

ところが、そういうときに亡くなってしまったんです。ご遺族に「台本がないか探してくれ」と頼んだんですが、見つかりませんでした。彼は書いてものは全て処分してしまうんですね。目の目を見ず、まだ悔いが残っています。私が一番残念に思っていることです。彼の作品のテーマはいろいろありますが、人間の優しさを求めるんです。悪い人間は出てこない。人を殺めたりもしますが、芝居を面白くする道具立てであって、テーマとしては、人間の優しさを歌い上げる。その辺が地域に迎え入れられる親しさだと思います。彼の作品は、全部、涙が出るような感動する作品が多いです。

芝居は、人の心を動かす凄い力をもっていますよ。劇団も今後どうなるのか、新しい劇団の動き、こゆるぎ座を続けてくれる人たちに速く受け渡さないで。こゆるぎ座も姿を変えた中で、小田原の中で芽を吹いてもらいたいですよね。



後藤翔如・作  
「小田原ちようちん」パンフレット

## ■関東大震災と小田原の文化

「文化資源発掘ワークショップ」に参加して、何人かの方々からお話を聞いたが、五十嵐写真館の店主・五十嵐史郎さんと、長唄三味線の杵屋六響さんの、共通して出てきた関東大震災の話に興味をひかれた。五十嵐史郎さんのお祖母さん、ハルさんとご主人の桑吉さんが明治時代、横浜の下で路傍写真街頭写真を始め、ハルさんの実家のある小田原に戻り、大正十一年、新しく店舗を構えた。翌十二年の関東大震災で店は潰れてしまった。

一方、杵屋六響さんのお母さん、杵屋響泉さんは、東京の築地で代々長唄三味線の家に生まれるが、生まれつき喘息もちで、小田原の空気が良いと転地療養に大正十一年の暮から一時滞在していた。それが翌年の九月、大震災に遭い、築地の家が壊れて帰れなくなつてしまった。閑院宮邸の近くに竹藪があり、町の多くの人が避難してきたが、その中でお産が始まった人がいて、響泉さんのお母さんが、持っていた日本鉄でへその緒を切つて無事お産を済ませたエピソードは、緊張状態の中の新しい生命の息吹のようなものを感じさせて、心を打つものがある。

ところで、関東大震災までの小田原はどんな状況だったのだろうか。日本全体としても、日露戦争に勝ち、国際社会でランクが急上昇し、小田原も国府津・熱海間が開通し、小田原駅が新しく開業し、市内も大きく発展しようとしていた。また、北原白秋や谷崎潤一郎などの文豪が小田原に居を構え、谷崎は佐藤春夫の例の「小田原事件」で物議を醸していた。ちなみに大正九年には、第一回箱根根拠が開催されている。小田原は産業都市としても、文化都市としても大きな期待が寄せられていたのである。それが突然の関東大震災である。全てのもがが一挙に崩壊した。市内の三分の二以上が燃えつくってしまったのである。谷崎も白秋も小田原を離れていく。時代は大正という華やかで、かつ複雑な時代から、昭和という激動の危険を孕んだ時代へと突き進んでいく。産業も文化も、個人の権利すらも、戦争の遂行として一点の為に、多くの、そして極めて厳しい制約を強いられるようになった。



# 小田原は、古くからの「芸所」です 杵屋六響さん（長唄 唄方・響泉会主宰）



母から聞いた事を上手くお伝え出来るかどうか分かりますが、芸事にまつわる昔の小田原の風情をお話させて頂きます。

母、杵屋響泉（きねやきょうせん）は東京・築地の生まれですが、子供の頃から喘息持ちで、お医者様に転地療養を勧められました。祖母の所へ稽古に通っていた芸者さんから「小田原は空気が良いから、いらしてみたら如何ですか」とお話があったのが、最初だそうです。始めは、「一枚の古い写真」近代小田原の光と影」にも載っている早川の亀屋旅館で様子を見て、鎌倉で方除けをした後、大正十一年の暮れに小田原に来たようです。翌年九月に関東大震災に遭って、築地の家が壊れて帰れなくなってしまい、小田原に住みつきました。

お三味線は、棹の太さで区別されます。義太夫とか浪曲は太棹、清元は中棹になり、長唄は細棹でございませう。

三味線音楽は大きく二つに分かれます。「語り物」は叙事的で、人形浄瑠璃や義太夫がこれに当たります。長唄は叙情的な「唄物」の代表で、風景や心情もさらりと表して唄います。長唄は歌舞伎の伴奏音楽として発生し、歌舞伎と共に発展しました。お芝居とは別に、独立した音楽として作られたものが演奏されるようになるのは、明治後期からです。

題材によって、謡曲的な重さがあったり、江戸の華やかさを唄ったり、時代物の雰囲気を出すなど、様々な表現を致します。

例え、端唄・小唄というものは、粋な世界で、風景を唄つてもちよいと遊び心があふれるものが多いように思います。邦楽は裾が広いので、種々の古曲を守るのとはとても大変な事です。

長唄の流派も数多くありますが、始まりは杵屋とされます。江戸初期に猿若勘三郎（のちの中村勘三郎）が一座を率いて「猿若座」を旗揚げします。その座付きの芝居をするに当たって出演したのが勘三郎の弟・初代杵屋勘五郎、息子の六左衛門、孫の喜三郎です。この喜三郎が二代目勘五郎となり、長唄の祖といわれています。この頃に「若衆歌舞伎」として美少年役者が持て囃（はや）されるようになり、その中から三味線の巧い勘五郎が当時最先端の三味線を用い、芝居を盛り上げる役目を担いました。以来、その三立てが長唄宗家として現在も続いておりませう。

その代々の家の、十二代目杵屋六左衛門の次男が母の父、五代目杵屋勘五郎でございませう。祖父は作曲に長けた人で、生涯に三百以上の作曲をしました。明治三十年代に交響曲を初めて聞いて以来、第一楽章・第二楽章という作曲形式の長唄を作りたいと考えたそうです。そして、第一部が春を表し、第二部が秋を表した「春秋（はるあき）」という曲を作曲しました。とても現代的な曲で、二つの季節の違いが絶妙に合体しています。

母の演奏はとても情感的で、エキサイティングなんです。祖父の作曲しましたものは特に、血の中から湧き上がるものがあるようです。詩を書きます父が、演奏を聴き「今日の勸進帳は花火が上がったね」と褒める位です。



「技人」表紙より、杵屋響泉先生

た。ストーリーがあるものでは涙が出るような表現をします。歌舞伎の音楽とはこういうものではなかったか、と感じますね。

昭和初期の花柳界は隆盛で、宮小路の見番（けんぱん）をご存知ですか。ロリンさんの向かいが巴屋というお蕎麦屋さんで、その横を入った所にあります。それが新時壽司の前に移った時に、とても大きな見番になりました。移る以前の方が芸者衆は沢山いたようです。

料亭も沢山ございませう。大きなところは、春日、榎金、大松。浜中という待合もありました。清風楼さん、柏又さん、だるまさんは現在に至ります。戦前にあった花菱というのは、現在のグリン木の裏の辺りです。

お芝居のお話になると、戦前には待合の宝玉と並んで、清楽亭という小屋がありました。寄席の物とか色物とか、旅芸人の一座や、女義太夫に、浪曲、講談もやりました。

有楽館というのは本町の、以前のオリオン座の所にあります。改築され大正六年に吾妻座と改称したそうです。映画がよく掛かりましたが、その合間の日に琵琶の演奏が多く、無声映画の弁士に付いていた人もいたようです。吾妻座は震災で小屋閉まりました。

宮小路には富貴座がありまして、そちらでは松竹の映画をやっていたそうです。そこは八月十五日の小田原の大空襲で焼けました。

青物町には復興館というのがあり、これは私達の時代の日活の建物ですね。そして、弥生という置屋も兼ねたお料理屋のようですが、それがあった所が中央劇場です。春日の裏で、現在のさがみ信用金庫の隣の所です。

御幸座は歌舞伎まで来ましたが、金比羅さんの金丸座と同じ形式で、舞台があって升席で、花道があって、二階がコの字になっている。売り子のおばちゃんに火鉢を借りて、座布団を借りて、というのが御幸座です。戦前の富貴座もその様式だったそうです。

戦前には、松原神社の裏に豊の家という大きな置屋がありました。その分家から出た方が、小津監督のいい人だったとか。一番大きな置屋は松とします。

昭和後期の宮小路でいうと、清小松、春日、榎金、いろはが固まってあり、見番の横に置屋が三軒位、裏が待合でした。今のセブンイレ

敗戦を迎え、新しい時代となった。昭和三五年、小田原城天守閣が復活。昭和三七年、小田原市民会館建設、五十嵐写真館二代目・登さんは、その建設過程と、市民会館の柿落としての公演をくまなく撮影、記録した。現在のようなコンパクトカメラもなく、フィルムが極めて貴重なときにリバーズ（陰陽反転してカラースライドに記録した。五十嵐写真館は、史郎さんのご子息、ハルさんのひ孫にあたる博さんが継いでいる。

長唄三味線の杵屋の家も、響泉さんが百歳を越えたが、孫の和久さんが三味線を勉強している。関東大震災からまもなく百年。市民会館も新しく芸術文化創造センターとして小田原の文化の中心拠点となるように建て替えられる。小田原の町の文化は、静かではあるが、力強く、脈々と続いている。

（ライブラリー隊員 田代勝利）

## ■粋な旦那がいた時代

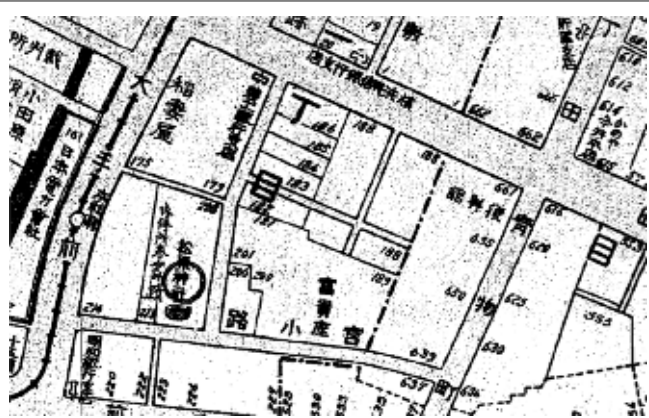
戦前の宮小路には見番（けんぱん）芸者と旅館などと繋ぐ商売）があった。杵屋響泉さんは長唄三味線の師匠として、芸者さんや箱根の旅館の女将に教えていた。「松原神社の裏に小徳さんが居まして、隣あたりに『豊の家』という大きな置屋さんがありました」と、娘の六響さんがインタビューに答えてくれた。話を聞いていると、当時の宮小路の様子がありありと目の前に浮かぶようだ。

ある時、お客さんが若い芸者に習っている曲を弾かせたところ、始めしか弾けなかったそう。お客さんは「次に来るまで、きちんと習っておきなさい」と云って月謝を渡した。その子は一生懸命稽古をして一曲仕上げた。しかし、その客はなかなか現れず、お正月になってようやく来られた。若い芸者はきちんと弾いたので、旦那から褒めてもらえて、ご祝儀までいただいたそうです。

「『最良（ひいき）にして下さるお客様が芸者衆を育てていた、お客様あつての芸者衆なんだよ」と響泉さんは語ったそうである。粋な旦那がいたからこそ、賑わった宮小路であった。

（ライブラリー隊員 深野彰）





昭和十三年当時の宮小路周辺の地図  
松原神社、富貴座、復興館の文字が見える

昭和十三年当時の宮小路周辺の地図  
松原神社、富貴座、復興館の文字が見える

昭和十一年位に「音楽協会」が小田原で立ち上げられ、ハーモニカで知られる綿貫善さんが会長を務められ、祖母の栄子が副会長でした。協会員として、舞踊は花柳小徳さん、坂東三之光さん、花柳寿太綱さん、長唄が杵屋栄子、稀音家小可音さん、箏曲では中村緑幸さん。皆で土地の芸を支えていらしたのでしよう。

母は若い頃から、塔ノ沢の福住さんや環翠楼さんなどに出稽古に行き、女将さん方をお教へしておりました。しかしお客様がお立ちになる度に中座されるので、お稽古にとても時間がなかったそうです。お忙しい中でもお稽古はずっと続けておいででした。ある日、大曲をご希望でも手に負えないお客様がいらつしやるとのこと。そこで母は、気持ち良く唄えるよう、気を入れて一曲弾いて差し上げました。そのお客様は大層喜ばれたそうです。昔は芸を嗜む粋なおお客様がおいででした。



片浦小学校体育館でのアウトリーチ(出張)演奏会

戦後、箱根には強羅や宮ノ下、湯本にも見番がありました。当時は盛んで、小田原の見番には長唄、清元常磐津、日本舞踊の各流派、お囃子と、お師匠さんが揃っていました。花柳



「長唄三味線ワークショップ」で三味線を教える六響さん

なるほどの大盛況でした。そのの小ホールが出来てからは、大体三年おきに長唄の会をさせて頂くようになりました。私個人の思い出としては、城内高校の建学百年記念のコンサートで長唄をさせて頂いたことが挙げられます。第一部は箏曲を生徒さんが合奏なさり、第二部に長唄を致しました。卒業生でもある歴代のお弟子さん達を含め三十人程で、まずは派手やかに『神田祭』で幕を開けました。お囃子さんには黒御簾(くろみす)の音楽を実演して頂き、三味線の特性や様々な効果音を紹介し、最後は「勸進帳」で締めました。大ホールでお若い方に広く長唄をアピール出来た事は、とても良かったです。思います。

現在の小ホールは多目的としているため、音響の質は不十分で、パイプ椅子で数時間聞くと辛いものがあります。新しい「芸術文化創造センター」の小ホールは、緞帳を備え、約三百の固定席とのことで、嬉しいことです。その頃には百三歳となる母も、そこで演奏できればと思います。

界は芸者衆だけで舞台を張りますから、踊り手から地方(じかた)まで全て致します。芸者さんは、長唄が基本のキの字ですね。東京から一流の先生を呼べる場所ですから、その気になれば何でも本格的な勉強が出来ました。現在では湯本の見番だけが残り、芸者衆も二百人位いますが、見番にお稽古に来る芸者さんは少ないようです。最近若い芸者さんを育てる動きもありますが、芸者衆の芸が求められなくなっているという事情もあります。

おだわらライブラリー通信 第 参 号

- 発行 小田原市 文化部文化政策課
- 平成26年度文化創造活動担い手育成事業 「文化資源発掘ワークショップ」報告書
- 編集 富士原 直也
- 資料提供 劇団こゆるぎ座 「技人」編集部
- 印刷 平成27年3月27日
- 問合せ 0465-33-1706 千250-8555 小田原市荻窪300番地 文化政策課 芸術文化創造係内 電話 0465-33-1706 / FAX 0465-33-1526

編集後記

- 生き生きと当時の光景が目には浮かぶようなお話しが聞けて、楽しいインタビューでした。(深野)
- 今回のインタビューで、小田原がとても身近に感じられました。貴重なお話を聞かせていただき有難うございました。(水間)
- 市民会館とともに歩んでこられた方のお話しを、載せることができませんでした。ぜひ続編を書きたいと思えます。(高塩)
- 8回にわたって市民会館の歴史を紐解く作業をしてきました。何人かの人にそれぞれの想いを述べていただきました。これらの人以外にも、多くの人が市民会館に関わっていたと思います。いずれかの機会に、お話しを伺いたいと存じます。(田代)
- 小田原市民会館は素晴らしい財産だったと感じました。閉館の日まで大切に使用して、その歴史に華を添え、新しいセンターにつなげていきたいと思えます。(神馬)
- 長い間、開館が多くの人の手を支えられて運営され、又、多種多様な催し物が行われていることに驚かされるとともに、感謝感激です。(鈴木)



鮎師